

出会い、つながり、元気になる地域づくり

9月15日に各町の区長や人権教育推進委員・推進員など、地域で人権教育を進めるリーダーを対象に課題別人権研修会を開催しました。研修会では、NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝の埋橋美帆さんから、差別がなく誰もが安心して暮らせる地域づくりについてお話しいただきました。

埋橋さんたちは、地域の隣保館の指定管理業務を受託し、「出会い、つながり、元気になる」を合言葉に活動しています。子どもから高齢者までが気軽に集える居場所づくり、地域の人たちによる子どもたちへの学習支援、地域の中での仕事づくりなど、さまざまな取り組みを進めています。

講演の中で特に印象に残ったのは、地域の皆さんが自分たちの課題に向き合い、話し合いを重ねながら、必要な居場所や仕事を生み出している姿です。活動を通して生まれたつながりは、



互いに支え合う関係へと育ち、やがて地域全体を支える力へ広がっていくことを知りました。その土台には、一人一人の立場や背景を理解し、大切にすること人権の視点が息づいています。

私たちの地域にも、年齢や性別、生活環境、価値観などが異なるさまざまな人が暮らしています。まずはあいさつを交わす、相手の話を聴く、地域の集まりに参加してみる、そんな身近な一歩から始めてみませんか。相手の立場や思いに寄り添い、互いを認め合いながら、できることを一緒に考えていくことが大切です。一人一人の出会いを大切に、少しずつつながりを育んでいく。その積み重ねが、誰もが安心して暮らせる地域をつくる力になります。

市長からの手紙
— 西脇を元気に!! —

154



担ぎ手に促され和田町のあばれ太鼓の屋台を担ぐ片山市長

地域
の力でつなぐ秋祭り

秋が深まると、夜には市内のあちらこちらから、太鼓の練習の音が聞こえてきます。10月の連休に各所で行われる秋祭りに私も参加しました。太鼓の力強い音、みこしを担ぐ皆さんの勇姿、子どもたちのはつらつとした声、担ぎ手の掛け声、沿道の皆さんの笑顔。その一つ一つに、ふるさとを大切に思う気持ちが息づいており、私も感動を覚えました。

今年も姉妹都市・アメリカ・レントン市から中学生の



西脇市長 片山象三

皆さんが西脇市を訪れ、秋祭りを見学しました。太鼓やみこしなど、地域に受け継がれてきた伝統文化に触れ、行事を支える皆さんの熱意を感じていただけたと思います。交流を通じて、西脇の魅力が海を越えて伝わることを、うれしく感じています。

人口減少や担い手不足が進む中、祭りを続けていくことは、容易なことではありません。祭りの日を迎えるまでには、太鼓の練習やみこしの手入れ、会場の準備、安全への配慮など、多くの時間と力を要します。長年にわたり伝統を受け継いでこられた皆さん、新たに力を貸してください。皆さんのご尽力があったからこそ、今年も地域の大切な一日を迎えることができました。世代を越えて役割を分かち合い、地域の誇りを次の世代へ手渡していく。その営みこそが、西脇市の大きな力です。ともに貴重な伝統文化を未来へつないでまいります。



比延前田城 復元図



堀の外側を廻る堀の基礎（2条の溝）



▼問合せ 郷土資料館（☎23-5992）

比延前田城跡は、加古川の東岸、現在の比延小学校の敷地にあった室町時代から戦国時代の城跡（居館跡）です。居館とは、城主が日常生活を行うために平地に築かれた城で、四方に堀や土塁を巡らせて防御を固めています。小学校改築に伴う発掘調査で、堀に囲まれた東西約100m、南北80mの規模であったことが判明しました。内堀によって東西に区画され、西側の区画が城主の館（主郭）と考えられます。堀の外側には堀を廻らせていました。城跡の南約100mには、住吉神社があります。同社に宛てた羽柴秀吉の書状の内容から、城主は比延庄を治める有力者だったことがうかがえます。

みんなでまちづくり—市民の皆さんのまちづくり活動—

西脇の魅力が集まる場所

～西脇情報未来館がリニューアルオープン～

市の観光や地場産業の魅力を発信する「西脇情報未来館」が、11月3日（火・祝）に旧来住家住宅で開催される「きっさんちふえす」にあわせ、リニューアルオープンします。

新しくなった展示棚には、西脇商工会議所の会員事業者が手掛ける播州織製品などが並びます。西脇ならではの商品を見比べながら、お気に入りの品を探してみてください。展示商品の多くはその場で購入できます。市民の皆さんはもちろん、観光で訪れた方も楽しめる施設です（開館は午前10時～午後5時）。



（改装イメージ）

当日は来館者に西脇チェックのカットクロス（先着200枚）をプレゼントします。

詳しくはこちら▶



西脇の自然 632

センブリ

りんどう科



草丈10～20cmほどの二年草（越年草）で、9～11月頃に星形の小さな白い花をたくさん咲かせます。「千回振り出しても（煎じても）まだ苦い」といわれるほど強い苦みが「センブリ」の名前の由来です。

この苦みから、センブリは「当に薬とすべき」という意味の「当薬」と呼ばれています。生薬として、天日で乾燥させたものは古くから胃腸薬に用いられてきました。

市内では、少し湿った草地や山道の脇などで見かけることがあります。よく似た植物にイヌセンブリがありますが、こちらには苦みがありません。以前、見分けがつかずセンブリの葉をかじりましたが、想像以上の苦さに驚き、「これだけ苦ければ確かに健胃効果がありそうだ」と感じたことを覚えています。

【西脇市動植物生態調査研究グループ】